

## 「聖書について」

### 1A 聖書の朗読と教えと勧め

#### 1B パウロの宣教

#### 2B テモテの信仰遺産

##### 1C ユダヤ人の遺産

##### 2C 聖書の靈感

### 2A 健全な教え

#### 1B 神の救いのご計画

#### 2B 敬虔にかなった教え

#### 3B 終わりの日における備え

## 本文

私たちはこれから、カルバリーチャペルの DNA として最も大切なものの一つ、「御言葉が最優先される」ことについて考えていきたいと思います。そしてその中でもう一つ、「神学のバランス」についても考えていきます。

### 1A 聖書の朗読と教えと勧め

このセッションでは、エペソにある教会に注目します。エペソにある教会は、新約聖書において実に多くの部分で語られています。使徒の働き 18 章から 20 章までに教会がどのように建て上げられたか、その始まりが書かれています。そして、パウロがローマの監獄で書いた手紙がエペソ人による手紙です。そして、私たちは黙示録 2 章において、紀元後 90 年代のエペソ人への教会を知っていますね。けれども、あまり知られていないのが、テモテへの手紙です。テモテへの手紙第一、第二は、テモテがエペソにおいて牧会をしている時にパウロが指導を与えている手紙です。

テモテが専念していることがありました。「1テモテ 4:13 私が行くまで、聖書の朗読と勧めと教えとに専念しなさい。」テモテが行っていたことは、まさに聖書講解であります。聖書を声を出して読み、説き明かし、そして勧めと教えをしていました。そしてその前の 12 節には、「年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。かえって、ことばにも、態度にも、愛にも、信仰にも、純潔にも信者の模範になりなさい。」とあります。つまり、彼らと生活を共にして、信仰の模範を示しつつ、聖書講解をしていったことがわかります。ですから、いわゆる聖書セミナーや聖書講座のようなものではありません。

### 1B パウロの宣教

エペソにおける宣教は使徒の働き 18 章から始まります。そこに、アレキサンドリア出身の雄弁なアポロがいました。彼は聖書に通じていて、主の道を霊に燃えてイエス様のことを正確に教えてい

たけれども、ヨハネのバプテスマしか知らなかった、とあります。けれども、プリスキラとアクラが彼を招いて、神の道をもっと正しく教えたとあります。このようにして、エペソでは教える働きから始まっています。カルバリーチャペルの働きは、ある意味でこのような役目を持っているでしょう。これまでキリスト教が宣教の働きにおいて、築き上げてきた霊的遺産があります。けれども、そこに聖書をしっかりと教えることに欠けていました。ですから、霊的遺産に対しては敬意を払いつつ、その欠けた部分を補っていくような働きであるように思われます。

そして 19 章に入りますと、パウロがエペソに来ました。そこで弟子たちに会いましたが、彼らはヨハネのバプテスマだけ聞いていて、聖霊の与えられることについては教えられていませんでした。アポロの宣教の結果であると考えられます。そこでパウロは、主イエスの御名によるバプテスマを授けたところ、彼らは聖霊のバプテスマも受けました。異言を語ったり、預言をしたりしていました。ここにも、カルバリーチャペルが強調しているところが表れていますね。聖霊のバプテスマ、その命ある働きがあつてこそその教会です。

そして使徒 19 章 8-9 節を読みたいと思います。「19:8-9 それから、パウロは会堂にはいって、三か月の間大胆に語り、神の国について論じて、彼らを説得しようと努めた。しかし、ある者たちが心をかたくなにして聞き入れず、会衆の前で、この道をののしったので、パウロは彼らから身を引き、弟子たちをも退かせて、毎日ツラノの講堂で論じた。」パウロは抵抗を受けています。実は彼がエペソに来たのは初めてではなく、18 章 19-21 節を見ると、会堂で彼が論じていて、ぜひもっと長くとどまるようにそこのユダヤ人たちは頼みましたが、その時は、彼は断っていました。しかし、今、彼は激しく反対を受けています。ここに、御言葉をまっすぐに語ることによる現象があります。人々は御言葉を聞きたいと願うのですが、実際に聞き続けると拒んでいくのです。語る人を招いているのですが、何か他の動機や隠れた目的があつたのでしょう。御言葉がまっすぐに語られることによって、誤った期待をかけていたことが明らかにされていきます。

そして 19 章の 11 節から 19 節までは、パウロの手によって、「驚くべき奇蹟」を神が行なわれしました。パウロの着ている手拭いや前掛けをはずして病人にあてると、その病気が去って、悪霊が出て行った、などの話があります。けれども、パウロが行なっていたのは飽くまでも神の御言葉をしっかりと教えていた、ということが主体でした。しるしは付いてきましたが、それを主要な目的にして行なっていませんでした。20 章 19-21 節には、彼は謙遜の限りを尽くして、涙をもって、主に仕えた。そして益になることは、少しもためらわずに知らせ、また、神への悔い改めと、イエス・キリストへの信仰をはっきりと主張しました。そして、20 章 27 節にあの有名な言葉があります。「私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。」聖書全体を説き明かしていきました。それなので、19 章 20 節には、「主のことばは驚くほど広まり、ますます力強くなって行った。」とあります。ですから、私たちカルバリーチャペルは、聖書を説き明かすことを強調します。もちろん、主の奇蹟や癒しや悪霊追い出しがあることを、今も主が生きておられるのですから期待します。しかし、それが主体ではありません。神のご計画全体が余すところなく知らさ

れることが教会の主な働きです。

## 2B テモテの信仰遺産

このようにしてエペソに教会が建てられました。そして、信仰を継承すべくテモテが牧会者として建てられます。

## 1C ユダヤ人の遺産

テモテにとって、聖書をくまなく教えていくことについては全く違和感がありませんでした。彼の母はユダヤ人であり、また祖母もユダヤ人だったからです。ユダヤ人の母から聖書を教えてもらっていました。「2テモテ 1:5 私はあなたの純粋な信仰を思い起こしています。そのような信仰は、最初あなたの祖母ロイスと、あなたの母ユニケのうちに宿ったものですが、それがあなたのうちにも宿っていることを、私は確信しています。」ちなみに、テモテは牧会者として、教師として、按手を受けた時に、聖霊の賜物を受けています(6節)。聖霊の働きと御言葉の教えのバランスが貫かれています。

ユダヤ人は、神からのおことばを預かる使命を受けていました。主がモーセに律法を与え、そしてヨシュアが、「わたしのしもべモーセがあなたに命じたすべての律法を守り行なえ。(1:7)」と命じられました。聖書を全体として守っていくことです。どこかだけを守り、その他は差し引いて良いということではありません。創世記から黙示録まで順番に聖書を説き明かせば、どこかで語りたくない話題が出てきます。けれども、そういったものも教えることこそが神の御心であります。そして、ユダの王ヨシヤが宗教改革を行なった時も、律法を聞いたからでした。「2列王 22:10-11 シャファンは王の前でそれを読み上げた。王は律法の書のことばを聞いたとき、自分の心を裂いた。」神殿の改修工事をしていましたので、ヨシヤには神を思う心が与えられていました。けれども、律法を順番にくまなく聞いていく時に、神の知識とご計画が知らされ、心を引き裂いて祈ったのです。

そして、バビロンから帰還した民が、再建のエルサレムでしていたことは、律法の説き明かしです。民の全てが広場に集まり、学者エズラが、「ネヘミヤ 8:3 夜明けから真昼まで、男や女で理解できる人たちの前で、これを朗読した。民はみな、律法の書に耳を傾けた。」と言っています。そして、他の祭司たちもそれを助け、7-8節にはこう書いてあります。「レビ人たちは、民に律法を解き明かした。その間、民はそこに立っていた。彼らが神の律法の書をはっきりと読んで説明したので、民は読まれたことを理解した。」そして彼らが自分たちの罪が示されて悲しみ、けれども主を喜ぶことが力であるというネヘミヤの言葉に励まされて、仮庵の祭りを祝ったのです。

このユダヤ人にある、聖書全体の説き明かしは復活の主ご自身が弟子たちに行われていました。「ルカ 24:27 それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事ごらを彼らに説き明かされた。」そして初代教会が、このように聖書全体を教えることを継承しているのです。

## 2C 聖書の靈感

もう一つ、ユダヤ人の信仰には、「聖書が神の言葉」であるというものがあります。モーセの律法から始まり、預言者の言葉も、それが人のものではなく神のものであるから、生活全ての基準において最高の権威を持っていると信じていました。それは一部に権威があるのではなく、全てに権威があるのです。ですから、パウロがテモテにこう話しました。「2テモテ 3:15-17 また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」すべてが靈感を受けた言葉だからこそ、そこには救いを得させる知恵があり、また私たちが良い働きをするために整えられることができるのです。

私たちはキリスト教会の中で、いろいろな神学的な議論が起こることを目にしています。フェイスブックやツイッター、ブログ等を見ていると、なんでこんな神学議論を活発にやっているのか分からないほどです。けれども、カルバリーチャペルの中では多少は話しても、大きな関心事となりません。なぜか？それは、聖書が神の言葉であることを純粹に信じているからです。聖書を信じているからであり、神学というものは二義的なものであることを良く知っているからです。そうした知識は大事ですが、本質的なものではないことを知っているからです。むしろ、聖書が神の言葉であることをきちんと信じていないから、自分の頭で理解しようとしてしまって、そのために一定の神学体系に拘ってしまいます。

## 2A 健全な教え

そして聖書全体を教え、神のご計画を余すところなく伝えることは、違った教えから私たちを守る力となります。パウロが、「神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。」と宣言した後で、このように警告しています。「20:28-30 あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中にはいり込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。」事実、エペソの教会に違った教えをするために論争をしかけている者たちがいたので、テモテはそのことで苦心していたことが、テモテへの手紙で分かります。

## 1B 神の救いのご計画

テモテへの手紙第一、第二を見ますと、その問題が浮き彫りにされています。パウロはこう言っています。「1テモテ 1:4-5 果てしのない空想話と系図とに心を奪われたりしないように命じてください。そのようなものは、論議を引き起こすだけで、信仰による神の救いのご計画の実現をもたらすものではありません。この命令は、きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛を、目標としています。」神のご計画の全体を知ることで、私たちはその目標が何であるかを知るんで

すね。そうすると、それはキリストが罪人のために世に来られたということであり、キリストの御業によって、「きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛を、目標」としていることを知るので。聖書のどこがこういうことだ、ということでないこと、私たちが神のご性質で変えられることが目標であることは明白なのです。

## 2B 敬虔にかなった教え

テモテへの手紙には、「敬虔」という言葉が多く出てきます。例えば、「1テモテ 2:2 それは、私たちが敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごすためです。」敬虔は、「神に似ている」という意味ですが、神のご性質にあずかることであり、言葉だけで争うようなものから避ける見分けと力が与えられる。公の礼拝において、男が争う、女が外見を飾るようなものからも離れることができますし、(1 テモテ 2 章)、監督や執事の資格もその教えに基づいています(3 章)。神の家族として、それぞれの人々を敬うこと(1テモテ 5 章)、また慈善行為を利用して、自堕落に生きて、空想話にそれている人々を戒めることもできます。また、金銭への欲からも守られます(6 章)。

## 3B 終わりの日における備え

そして聖書をしっかりと学ぶことは、そして終わりの日において、教会が守られること意味します。終わりの日には、禁じていないものを禁じる教えが出てくることをパウロは教えました。「1テモテ 4:1-3 しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。それは、うそつきどもの偽善によるものです。彼らは良心が麻痺しており、結婚することを禁じたり、食物を断つことを命じたりします。しかし食物は、信仰があり、真理を知っている人が感謝して受けるようにと、神が造られた物です。」そして、自分を愛することを前提にした生活がはびこります。「2テモテ 3:1-5 終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり、情け知らずの者、和解しない者、そしる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快樂を愛する者になり、見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。」

そして耳障りの良いことを聞きたがるようになります。「2テモテ 4:3-4 というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。」教会の背教については、世の終わりのセッションで学びますが、聖書全体を学ぶことと、終わりの日における教会の逸脱は密接につながっています。

このように聖書への信仰が、教会のあるべき姿であることを見ることができました。カルバリーチャーペルの DNA がどれだけ私たちを悪いものから神が守ってくださったかということを思うと感謝に耐えません。